

成果主義とのたたかい 第4回 四国ブロック

労働運動再生が反撃の力だ

第二章 戦後日本労働者運動のあゆみ(後半)

司会||今回は、第二章の後半部分のレポートをお願いします。

○さん||それでは報告します。

3 反合理化闘争と組織づくり

総括から職場抵抗闘争への課題

「反合理化闘争の基調は、資本の非人間化に対する労働者の人間回復の闘争であり、階級的組織づくりです。『組織綱領草案』は職場闘争が最重要、として提起されました

た。しかし、結果的には、この職場抵抗闘争を回避したことで、日本労働運動は衰退していくことになりました。合理化の「本質」は搾取の強化であり、日常の生産活動のなかで資本の鉄則として絶えず貫徹されています。そのため、三池では「五人組」を土台とする抵抗闘争の組織づくりを課題として位置づけたのです。

馬とニンジン・・・資本主義的合理化

資本主義的合理化とは何かということですが、馬とニンジンの中で、馬は人參

10本与えられながら、米俵を運ぶ労働をさせられます。次第に馬車などの設備や道路事情が良くなりますが、馬の仕事は楽にはならず、運ぶ量は増えても与えられる人參は変わらず、労働強化だけ進められ、最後には必要なくなり捨てられました。このように、資本主義社会は私たち労働者が馬の役割を果たします。賃金の切り下げ、労働時間の延長や労働強化、資本の利潤追求、搾取の増大のために行われるのが資本主義的合理化なのです。この攻撃によって組織破壊、権利侵害、思想攻撃など日常的に人間性の否定が行われるのです。

◆みんなの学習講座



1960年7月3日、大牟田駅から三池労組本部までのデモ行進。(支援共闘の仲間と共に進めるデモ隊)

つねに二つの目標をもって

三池の長期抵抗路線を一言で言うならば、たたかひのなかで組織するということです。理論と実践の結合は、実践に密着した学習が必要で、相互に同時に追求される必要があります。一つのたたかひには二つの目標があります。一つはたたかひには二つの目標を実現させるのか、二つは資本主義下の労働者階級の最後の勝利をめざしたたたかひへ

労働者を組織していく、この積み上げの継続以外にありません。

4 総評解体・連合成立

国鉄闘争にまだ、

内部から腐り始めた総評

総評労働運動の解体、社会党解体の攻撃は、新自由主義の柱の一つとしてすすめてきました。総評指導部はすでに80年に「労戦統一推進会議」を容認、そして「右翼再編成」に走り出すなど、内部から腐り始めていました。一方、社会党も科学的社会主義を排除し、86年に決定された『新宣言』により路線転換を進め、「右翼再編成」「国鉄民営・分割」にも賛成したのです。独占資本、国家権力、マスコミは一体となり「総評解体」「連合成立」に全力を集中し、総評最後の砦である国労を攻撃したのです。

総評解体の布石・国労攻撃

国労組合員になされたJRへの「採用差別」は正に指名解雇であり、採用された者もJRでは「配属差別」を受けるなど、不当労働行為としてこれまで200件もの申立が行われ、勝利命令を数多く勝ち取っています。しかし、総評の指導は国鉄当局への提訴取下げの受け入れでした。

労資協調路線の「連合」

89年、ついに総評は解散し、同日に「連合」が成立しました。しかしその路線は労資協調であり、日本の多国籍資本の競争時代を勝ち抜くためのパートナーとして、資本主義の合理化を進めるための、国家体制維持装置の一環となったことを意味するものでした。その背景に「能力主義管理」があり、全職場に浸透していくことになりました。

そして、これに抗する産別、地方組織、単組が結集し、全労協が発足します。



現場を検証する労組員（1949年に国鉄東北本線で発生した「松川事件」は労働組合潰しを目論んだ冤罪事件だった）。当然のことですが、全員無罪となった。

国鉄闘争にまなぶ

国鉄の分割・民営化の目的は、中曽根元首相が言明しているように、国労を崩壊させ総評・社会党を解体し、憲法改正「正」することでした。今日の労働運動の現状から見れば、資本家階級の目的の大半は達成したといっても、過言ではありません。しかし、国労のたたかってきた24年間の成果は必ずや、労働運動の再生につながることも事実です。

労働運動の再生こそ、民主主義の力に

日本の労働運動の中心的な役割を果たしてきたのは、人権闘争であり、反戦・平和運動であり、民主主義を求めるたたかいであり、その担い手は、女性であり、青年労働者でした。そのため、資本の側は必死にあって、職場闘争路線を攻撃し、労働運動への懐柔戦術で、徐々に労働運動の総体を右へ右へと体制内化に全力をあげてきました。

その過程で行われたのは、青年部や女性部運動の否定であり、労働者の学習や討論の場などが奪われてきました。資本の攻撃的なのは、あらゆる職場と地域から労働者思想の排除と根絶です。そのため、私たちがそれを取り戻すたたいを行わなくてはなりません。これが、平和と民主主義をうち立てる力であり、職場に小さな話し合える場を組織することが、今こそ求められています。

労働運動の再生はここから始まります。

反合理化闘争は階級的組織づくり

司会Ⅱ総括から職場抵抗闘争への課題というところで、組織づくりの具体的、実践的行動指針が不足し、職場抵抗闘争を回避したところに、反合理化闘争路線の後退の、最大の原因があります。反合理化闘争の基調は、資本の非人間化に対する労働者の人間回復の闘争である、と書かれています。

YnさんⅡ重要なのもう一つ、反合理化闘争は階級的組織づくりであるということ、それが日本ではできなかったということです。

司会Ⅱ職場の問題点を要求にしてい、そのためには階級的な意識を青年労働者の身に付けさせるかが鍵となっています。青年部を担っているAtさんどうですか？

AtさんⅡまず合理化ですが、言葉の響きだけ聞くと、効率とか能率とかいう良い意味でとらえがちです。でも、僕たちが労働者の目線や立場で考えた時に、合理化で良くなることはないというような話を青年部のなかでよくしますね。

◆みんなの学習講座

〇さん 確かに良い意味で聞こえがちですね。

A tさん 「馬とニンジン」のなかでも出てきましたが、合理化することで、僕たちの賃金が上がるとか、働き方が楽になるのではなくて、より厳しいものになるし、社全体を見ても合理化が進むことで、労働者がより少なくて済むようになってしまいうということ、みんなが共通の認識を持つ必要があると思います。

Aさん 〇今や仕事するのにパソコンは当たり前になつてるな。

司会 〇僕らも役場に入って20年ほどになりますが、ちようどパソコンが職場に入る転換期だったと思います。それが今は一人1台、職場によっては、一人2、3台のパソコンを使って仕事をしています。

Iさん 〇特に会計や固定資産等の情報の入力などが、いち早く導入されました。昔はそれらの入力業務に庶務係というような職員が専門でいましたが、システムを導入することによって誰でもできるようにされました。

Sさん 〇文化の発展というのと、合理化というのは使い分けないといけない。資本家にするのと、1円でも儲けるためにどうするかと、考えるわけです。その一つが長時間労働です。もう一つは労働強化です。さらに生産性向上のために、有能な機械を導入します。もつと端的なのは、直接労働者の賃金を下げることです。そして最も恐ろしいのは、そういう合理化攻撃を受けても、当たり前だとして、問題と思わせない思想が労働者の犠牲の下にやられる合理化なのです。

司会 〇今の話は、まさにこの「馬とニンジン」の話ですね。

Sさん 〇政府は、「残業代ゼロ法案」を決めようとしています。労働時間でなく、成果により賃金を支払うという方式にしようとしています。これは労働基準法の解体攻撃です。

A tさん 〇諸外国の労働者は、メリハリがはっきりとしていて、勤務時間外は仕事をしない、といった考え方が主流ですけど、

日本人は仕事をするこつや、休みを取らないこつが美德というか、変な生真面目さがあつて、上手く利用されているような気がします。

Y nさん 〇ヨーロッパ等、諸外国と歴史の違いというか、親の代から労働者意識が違ふとその子どもも、小さな頃からその意識を感じて大きくなる。それに、企業別労働組合という日本の特徴から、企業のためにという意識がどうしても出てきます。

M aさん 〇日本と外国の違いで言うと、「過労死」が圧倒的に多いのが日本であるということが挙げられます。

司会 〇「Karouji (過労死)」という言葉が、世界で通じる共通語になつてしまつていますね。

M aさん 〇海外では、働きすぎで死ぬことは、まずないな。

Sさん 〇昨年11月1日から過労死等防止対策推進法が施行されていますが、そのなかに長時間労働を規制するものは盛り込まれていません。80年代に過労死が問題になりましたが、既に成果主義賃金制

度の導入により労働者が競争にさらされ、長時間労働をせざるを得ない環境がつけられていたのです。

組織づくりは人づくり

司会Ⅱその資本主義的合理化に立ち向かうためには、常に二つの目標を持って、ということが書かれています。

SさんⅡ二つの目標というのが非常に重要で、集会を開いて何人結集したから成功したというのがあります。確かに人数というものも大きな指標にはなりますが、それよりも重要なのは、その過程でどれだけの仲間をつくれたか、組織としての強化が図られたかということです。その総括なしに行事消化するだけでは、何の発展もないということです。

司会Ⅱ学習だけでは何も変わらない、たまたかのなかに身を置き、仲間を拡大しないといけないということですね。

SさんⅡこの事務所向坂逸郎さんの色紙がありますが、「組織はプロレタリアート

にとつては力である」と書かれています。労働者階級にとつて、たまたかの原動力は仲間であり、組織づくりをすることが大事です。この組織づくりは、仲間との信頼によるものです。信頼は、長いたたかひの構えによりできるものです。崩れるのは早いのですが、作り上げるのは容易ではないのです。

MaさんⅡ役員をしても、してなくても、一人ではやはり弱い存在で、仲間が必要なのは一緒ですね。

OさんⅡ友達と仲間は意味合いが違います。労働者思想を持つてたたかひ続けられる、まさに信頼で結ばれた存在が仲間ですね。

YnさんⅡまさに、「資本主義下の労働者階級の最後の勝利をめざしたたかひへ、労働者を組織していく」という、仲間を組織するのは本当に難しいが、課題でもあります。

組織の内部矛盾

司会Ⅱでは次に「総評解体・連合成立・国

鉄闘争にまなぶ」のところに入ります。総評が内部から腐り始めたところですが、資本により、労働運動も弱体化していくことになりました。

YnさんⅡ総評は幹部から、つまり上から腐り始めたのです。

MさんⅡ企業別労働組合の弊害もあり、会社あつての労働者という思想が、資本主義によつて植え付けられていったことが大きいですね。

IさんⅡ連合路線になることで、能力主義管理が一緒に浸透していった、ということころは重要だと思えます。賃金合理化も、連合路線になつて一気に加速したのです。

司会Ⅱでは最後の「労働運動の再生へ」、ということころですが、国鉄闘争団が残した運動をしっかりとして継承して、全国的に拡げていこうということで、四国でも毎年合宿をして、闘争の継承と新たな闘争の連帯を行つていきます。闘争は終わつていないということですね。

YnさんⅡ反省するとすれば、私たちが国鉄闘争団を助けると言いながら、物的な

◆みんなの学習講座



新聞職の支部ユニオン労働者産産

部分での支援に終始したことです。本来は各職場、各労働組合で同じような攻撃がかけられるなかで、それに対して運動的な側面から職場闘争を組織して、資本・当局とたたかっていくことが、彼らを支えることになるにも関わらずそうなりませんでした。

IさんII支援から共闘へ、というところですね。三池との違いは、三池闘争の場合は総評指導下、労働者総体で総資本に立ち向かったのに対し、国鉄闘争では、そもそも

総評が資本と一体となって、国労を潰しにかかったというところに大きな違いがあります。

YさんII国労だけが孤立(孤軍奮闘)したのではなく、労働者総体が既に資本に押し込まれていたのが原因ですね。

司会IIそうですね。今まさに、平和憲法が危ない状況になっています。労働運動の盛り上がりがある時には、平和運動や民主主義、人権擁護を求めるたたかいがありました。その担い手は青年や女性の労働者でした。

YさんII労働者は、資本に雇われて働くことで生きていくしかないが、その賃金も値切られて、反発すると放り出される。そこで、労働組合という団結を活用してたたかっていくか、値切られても我慢して生きていくかが問

われることになる。国労は、それを問われたわけです。首を切られてでも、たたかいのなかに身を置いて長い間彼らは、たたかってきたのです。

走れば回る風車

SさんII去年、仲間の結婚に、初めて色紙を書いたのですが、「走れば回る風車」という言葉です。風車は当然、風が吹けば回りますが、今は労働者側にとって、自然に吹く風がない状態です。だからといって、回らないのは仕方ないというのではなく、自らが走れば勢いよく回るので。

YさんIIこれが始まりであり、そこから二章の初めに戻ることになります。総評と左派社会党の結合により始まったところに戻り、再生することが必要なのです。

司会II活動家といわれる者が風を待つのではなく、その場に行つて話をする、学習をするところで仲間を組織していく、それが労働運動の再生の始まりであるということです。今回は、第三章に入ります。